

しくなる。そんな那珂姫のすっきりしない思いをあおるよ
うに、また桜が舞う。

この桜大臣の屋敷は、その名のとおりみごとな桜で有名
だ。昔、帝がお住まいの内裏で桜が枯れた時は、ここの桜
を一本献上したほどで、以来この家は『桜大臣家』と呼ば
れるようになった。

でも、いくらみごとでも、花の命には限りがある。そう
思えば、静かにすわってなどいられない。

那珂姫は大きく息を吸いこむと、声をはりあげた。

「もえぎ、もえぎ」

その声はのどかな空気を切り裂いて響きわたり、まもな
く足音とともにあわてた声近づいてきた。

「那珂姫、はしたないお声を出さないでください」

だが、しかられることなんて気にしてられない。

声の主は那珂姫と同じく十五歳の娘で、名をもえぎとい
う。この桜大臣家の二の姫である那珂姫は、母の顔を知ら
ない。那珂姫を産んですぐに世を去ったからだ。代わって
那珂姫を育てたのが、もえぎを産んだばかりであった初野
という女性だ。那珂姫ともえぎは表向き主従の間柄ではあ
るけれど、姉妹のように育ってきた。

そのもえぎが那珂姫の袖を引いて部屋奥へ連れもどす。

「那珂姫、もっと奥に。いったい何のご用ですか」

「もえぎ、車のしたくをして。花を見に行きましよう」

「え、これからですか？」

ご大家の姫君のお出かけはなかなか手間と時間がかかる。
車に牛をつけて、お供をそろえて、着がえをして。ただし、
那珂姫はそういうめんどうくさいことが大きらいだ。

「ぐずぐずしていたら桜が散ってしまう。こんな日に、う
すぐらい部屋の奥でじっとしてなんかいられないわ。この
家のよりもっときれいな桜を見に行きましよう」

「でも、母にはお話ししましたの？」

「するわけがないじゃない。だから急いでいるの。初野に
見つかる前に逃げ出しましよう」

もえぎがあわてた。

「困ります。そんなことをされたら、あたしがまた、姫君
を軽々しく外に出したと母にしかれます」

「平気よ、初野はいそがしいし、あの太った体ではすばや
く動けやしないし、気づいた時はもう遅いわよ。とにかく
出かけてしまえば、帰ってからわたしがしかられるもの」

だがそこで、那珂姫は誰か御簾の陰にいるのに気づいた。
「そこにいるのはだれ？ ……あ」

まずい。

当初野がしずしずと入ってきた。もえぎが思わず首を
すくめている。年とともに貫禄と目方が加わる一方の、大
変な迫力がある女性だ。年若い家来など、主人の桜大臣よ
りこの初野の方をおそろしがっているほどだ。